衆知のとおり、我が国の知的障害者更生施設における高齢者の割合は激増しており（表１参照)、５０歳以上の人達の入所者数に占める割合は４０％弱、６０歳以上の人達の数は１５％となっており、その平均年齢も４０歳をこえて、今や「更生施設は中高齢者施設になった」といっても過言ではあるまい。このような背景から、本研究調査では、１０年前の１９９１年次との比較を意図して、１９９１年と同様の調査規模、調査内容により調査が施行され、我が国の中高齢知的障害者の実態を縦断的、横断的に把握し、今後の高齢知的障害者の支援介護のありかたを検討することを目的とした。

２．研究の概要

言うまでもなく、加齢に対する調査分析では、横断的な年齢階級別各領域平均値の比較検討の調査により、縦断的に、あるいは時系的に個人及び集団の平化を追う調査分析によるべきと考えている。本調査は１９９１年に吾国の全施設を対象に行った、施設の概要と加齢への考え方を把えた結果と、２００１年に同様の対策内容によった調査結果の比較検討による初年度”施設の方向性を探る調査分析”と、その資料を背景として、我が国の中高齢者施設に生活する知的障害者それぞれの心身の健康の実態（アクティブティ、ADL、IADL、毎日の生活、健康、疾病等）と１０年の経過を把握して、高齢者処遇の資とするための、第２年度調査を行った。なお、高齢者を対象として、介護保険制度が実施され、その内容の推移が高齢者の生き様に強い関連がある。高齢の人々が、加齢を追って、なお自らの選択による生き方を求めることが考えられる現状では、殊更に知能に障害のある人々を対象としても、その対応が看護・介護だけでなく、生き様のあり方をも求めてゆなければならないことを提起したい。そのことから、本研究では、介護保険と同様に第１の対象群を６５歳以上に、第２の対象群を４０歳とした。それぞれの年齢階級群の実態を把え、可能な限り、それらの年齢群の生きる方向を探る資としたいと考える。２年間の研究のプロセスは次のように展開された。

(1) 初年度調査

我が国の特別養護老人ホーム、及び知的障害者更生施設全てを対象とした。特別養護老人ホーム調査では、４,０１７施設のうち回答があった２,３１８施設（１５５,３３８名）知的障害者更生施設群では１,２５１施設のうち、１,０５５施設（６７,９３２名）の調査を行った。調査の内容は施設の基本属性、４０歳以上の高齢知的障害の有無、とその人達の程度別状況、介護状況及び高齢知的障害者在籍のための問題の有無と内容、さらに、将来の望ましい生活の場等であった。それぞれの関連等を分析・検討した。

(2) 第２年度調査

初年度調査において、回答を得られ調査を行った施設の中から、４０歳以上の高齢知的障害者を２,９３１名をランダムに抽出し、依頼した。これらの人の加齢のルロフィールを検討し、支援、介護のありかたの資料を得るべく、改めて調査票を作成、分析を行った。調査の内容は基本属性、日常生活（行動範囲、ADL、IADL、生活環境、健康と身体状況、活動状況等）である。

(3) 経年変化

１０年前の１９９１年との経時的変化を分析・検討した。

３．初年度の研究概要

初年度研究の概要は次のとおりであった。

平成１１年度（１９９９年）は、かつて１９８９年に実施し１９９０年に発表した全国調査と同様の規模と内容（調査票巻末参照）により、全国の知的障害更生施設（入所）並びに特別養護老人ホームに対して悉皆調査を実施し、その入所者の状況を２０００年に把握検討した。

(1) 初年度調査概要

① 対象数（表２参照）

・知的障害者更生施設の４０歳以上の入所者は男１６,８７５名、女１６,２３４名計３３,１０９名であった。

・特別養護老人ホームに入所の知的障害者数は男１,３３０名、女２,２２１名、計３,５５１名であった。

・性別の傾向は４０歳代までは男の数が多く、５０歳以降は女が多くなった。

② 程度別割合　（表３参照）

・知的障害群に重度の人が多く、特別養護老人ホームでは軽度の人が多い。

・上記の傾向は１９９０年、２０００年に差はない。

③ 身体障害別割合　（表４参照）

・すべての領域において特別養護老人ホーム入所者に障害ある人の割合が多い。この傾向は精神遅滞の程度には影響なく、加齢により障害の程度（言語の領域さえも）は著しく増加することを示した。また、１０年前の調査でも同様の傾向を示している。

④ 介護度の推移　（表５、表１、表６参照）

この調査は介護保険導入により行われたもので、１０年前には行われていない。有意差はないが、６５歳以降に介護度の変化がみられ、７０歳以降では加齢を追って増加する。因みに８０歳以降では要支援が減少し、全ての人に介護が必要になっている。表１に示した施設利用者の加齢の推移から、これからの介護のニーズの増加が推測される。

⑤ 高齢知的障害者が入所していることの問題

２０００年調査の内容から、特別養護老人ホームでは問題「あり」「なし」殆ど半数であるが、知的障害者更生施設では７０％が「問題あり」と答え、「問題はない」は３０％にすぎない。特に検討はしないが、知的障害者更生施設に高齢者の出現が問題視されているのであろう。このことから、高齢知的障害者の今後の生活の場についての答えは興味深い。次のとおりである。

１位	老人施設	３７．９％
２位	新しい処遇施設	３７．４％
３位	更生施設	１６．７％
４位	家庭	８．０％

表１ 高齢者の知的障害者更生施設に占める年度別推移

	利用者数(人)	50 ～ 59 歳(%)	60 ～ 64 歳(%)	65 歳以上(%)
1989 年	49,485	14.4	3.3	1.1
1990 年	50,827	15.4	3.8	1.2
1991 年	54,126	16.6	4.4	1.4
1992 年	56,188	17.8	4.9	1.6
1993 年	57,823	18.7	5.4	1.9
1994 年	63,080	19.9	6.1	2.2
1995 年	64,862	20.6	6.7	2.6
1996 年	65,115	21.8	7.6	3.0
1997 年	65,513	23.2	8.2	3.5
1998 年	66,431	25.0	8.8	3.8

表２ 年齢階級別（４０歳以上）の割合

		40 ～ 49	50 ～ 59	60 ～ 64	65 ～ 69	70 ～ 79	80 以上	計
知的障害者更生施設	男	49.6%	32.5%	9.7%	5.3%	2.9%		16,875 名
	女	45.4%	35.6%	10.3%	5.5%	3.3%		16,234 名
特別養護老人ホーム	男	11.7%			24.8%	46.7%	16.8%	1,330 名
	女	8.2%			19.7%	50.0%	22.2%	2,211 名

表３ 程度別割合

	中・軽度	重・最重度	測定不能	不明	計
知的障害者更生施設	30.4%	60.7%	8.3%	0.7%	33,452 名
特別養護老人ホーム	51.8%	29.5%	4.8%	13.9%	3,551 名

表４ 身体障害別割合

	言葉受容	言葉表出	手先機能	移　動	聴　力	視　力	障害なし
知的障害者更生施設	17.9%	27.8%	10.6%	17.2%	7.4%	9.9%	48.2%
特別養護老人ホーム	45.1%	48.5%	24.0%	45.1%	11.2%	11.4%	19.3%

表５ 介護程度別割合

知的障害者更生施設群　　( )人数

	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	計
要 支 援	34.2%	34.8%	34.7%	30.1%	25.0%	33.9%(11,016)
要介護１	21.2%	24.0%	25.6%	25.8%	25.5%	23.0%(7,458)
要介護２	18.9%	18.2%	18.5%	22.3%	21.1%	18.9%(6,131)
要介護３	12.1%	11.0%	10.8%	11.5%	13.6%	11.6%(3,796)
要介護４	9.2%	8.0%	7.2%	8.0%	10.2%	8.6%(2,780)
要介護５	4.4%	3.9%	3.2%	2.3%	4.7%	4.0%(1,303)
計	100% (15,449)	100% (10,997)	100% (3,254)	100% (1,747)	100% (1,010)	100% (32,457)

特別養護老人ホーム群　　( )人数

	64歳以下	65～69歳	70～79歳	80～89歳	90歳以上	計
要 支 援	21.4%	21.5%	14.4%	11.0%	1.5%	15.8%(554)
要介護１	16.9%	20.0%	20.9%	19.5%	24.6%	20.1%(706)
要介護２	20.6%	18.7%	20.6%	20.1%	12.3%	19.9%(699)
要介護３	15.7%	16.7%	18.3%	18.7%	23.1%	17.8%(626)
要介護４	15.4%	16.4%	17.9%	19.9%	26.2%	17.8%(626)
要介護５	10.0%	6.6%	7.9%	10.8%	12.3%	8.5%(297)
計	100% (350)	100% (754)	100% (1,712)	100% (627)	100% (65)	100% (3,508)

表６ 10年間における調査対象群の年齢構成推移　　( )人数

	調査年	男	女	計
40～49歳	1991年	53.7%(510)	46.3%(440)	100%(950)
	2001年	52.9%(261)	47.1%(232)	100%(493)
50～59歳	1991年	50.8%(294)	49.2%(285)	100%(579)
	2001年	51.2%(323)	48.8%(308)	100%(631)
60～69歳	1991年	43.4%(345)	56.6%(450)	100%(795)
	2001年	48.7%(467)	51.3%(492)	100%(959)
70～79歳	1991年	40.1%(180)	59.9%(269)	100%(449)
	2001年	43.2%(302)	56.8%(397)	100%(699)
80歳以上	1991年	44.0%(40)	56.0%(51)	100%(91)
	2001年	28.2%(42)	71.8%(107)	100%(149)
計	1991年	47.8%(1,369)	52.2%(1,495)	100%(2,864)
	2001年	47.6%(1,395)	52.4%(1,536)	100%(2,931)

Ⅲ．２００１年調査の概要

１．目的

本研究班では平成 11 年度研究において、全国の知的障害者更生施設（入所型）および特別養護老人ホームを利用している高齢知的障害者に対する悉皆調査を実施し、高齢期にある知的障害者の支援・介護のあり方を検討した。この結果を踏まえて、平成 12 年度研究では、地域別、年齢別にランダムに抽出した施設の入所者の個別調査を実施し、高齢知的障害者の加齢のプロフィールを検討し、支援・介護のあり方の基礎的資料を得ることを目的とした。

２．方法

対象者：平成 11 年度調査において協力が得られた施設は、知的障害者更生施設（以下、「更生施設」とする）では 1,055 施設（入所者総数 67,932 名、その中 40 歳以上 33,109 名、全入所者に占める割合 48.7%）、特別養護老人ホーム（以下、「特養」とする）2,318 施設（入所者総数 151,959 名、知的障害者 3,551 名、全入所者に占める割合 2.3%）であった。その中から、ランダムに抽出して施設に個人調査を依頼し、回答が得られた 2931 名を分析の対象とした。

調査内容：上記の目的を達成するために次の調査項目で構成された調査票を作成した。

- ✧ 対象者の基本属性（性別、年齢、知的障害の程度、知的障害の判断根拠、知的障害の程度、知的障害の原因）
- ✧ 日常生活の状態（行動範囲、行動範囲の変化状況、ＡＤＬ及びＩＡＤＬ、部屋の利用者数、人間関係，クラブ活動・行事・作業への参加状況）
- ✧ 日常の健康及び身体状況（加齢に伴う変化及びその内容、健康状態、疾病状況、身体障害手帳の有無と身体障害の内容）

この中、ＡＤＬ及びＩＡＤＬについては、食事、排泄、入浴、着衣、移動、聴力、視力、手先の機能、言語明瞭度、会話理解・意志表示の 11 項目とし、自立～全介助の５段階に区分して得点化した（自立：１点、ほぼ自立：２点、一部介助：３点、要介助：４点、全介助：５点）。

調査方法：調査の主旨を示した依頼状と共に調査票（付表）を施設代表者に送付し、一定期間留め置きした後、郵送による回答を求めた。

分析方法：調査内容については、全て項目別に集計して回答状況を分析すると共に、関連する項目間の相関係数や$\chi 2$値を求め、必要に応じて分散分析を行った。統計解析には SPSS9.0 を用いた。

３．結果

✧ 基本属性について

(1) 対象者の内訳

回答が得られたのは、更生施設では 2,221 名（65 施設）、特養では 710 名（167 施設）、合計 2,931 名であった。対象者の平均年齢は 62.4 歳（範囲 40-103）であり、年齢構成は、40-64 歳が 1 、464 名（49.9%）、65 歳以上 1467 名（50.1%）であった。65 歳以上の全体に占める割合は、65-74 歳 1042 名（35.5%）、75 歳以上 425 名（14.5%）であった。更生施設と特養では年齢分布に有意な差があり、65 歳以上が占める割合は、更生施設 37%（822 名）に対

して、特養 90.8%（645 名）であった。（表 7）

表 7．対象者の内訳

	40-64 歳	65-74 歳	75 歳以上	合　計
知的障害者更生施設（65 施設）	1,399(63.0)	690(31.1)	132(5.9)	2,221(100)
特別養護老人ホーム（167 施設）	65(9.2)	352(49.6)	293(41.3)	710(100)
合　計	1,464(49.9)	1042(35.6)	425(14.5)	2,931(100)

(2) 性別

性別では、男性が 47.6%(1,396 名)、女性が 52.4%（1,536 名）であり、更生施設では男女の比率に大きな差がないが（50.7%：49.3%)、特養では男性が 37.9%（269 名）であるのに対して女性が 62.1%（441 名）であった。

(3) 知的障害の程度

知的障害の程度は、全体では中軽度が 1,105 名（37.9%)、重度・最重度が 1,724 名（59.2%）であったが、施設別・年齢構成別にその割合を見てみると、更生施設では、年齢群に関係なく重度・最重度の占める割合が 60 %以上であるのに対して、特養では 40-64 歳に重度・最重度の占める割合が多く、65 歳以上では中・軽度の占める割合が多かった。（表 8）

表 8．施設別・年齢階層別知的障害者数

	知的障害者更生施設				特別養護老人ホーム			
知的障害の程度	中・軽度	重度・最重度	不明	合　計	中・軽度	重・最重度	不明	合計
４０－６４歳	454 (32.7)	912 (65.9)	24 (1.7)	1390 (100)	19 (30.2)	43 (68.3)	1 (1.6)	63 (100)
６５歳以上	300 (36.6)	512 (62.5)	7 (0.9)	819 (100)	332 (51.8)	257 (40.1)	52 (8.1)	641 (100)

(4) 知的障害の判断根拠

対象者を知的障害と判断した根拠について尋ねた結果は（複数回答)、更生施設では、療育手帳の保持が最も多く 1,901 名(85.6%)、次いで公的機関の判定 1,746 名(78.6%)、医師の判断 542 名(24.4%)であった。特養では療育手帳の保持 395 名(55.6%)、公的機関 207 名(29.2%)、医師の判断 141 名(19.9%)となっており、順位は更生施設と同様であるがその率は相対的に低かった。（図 1）

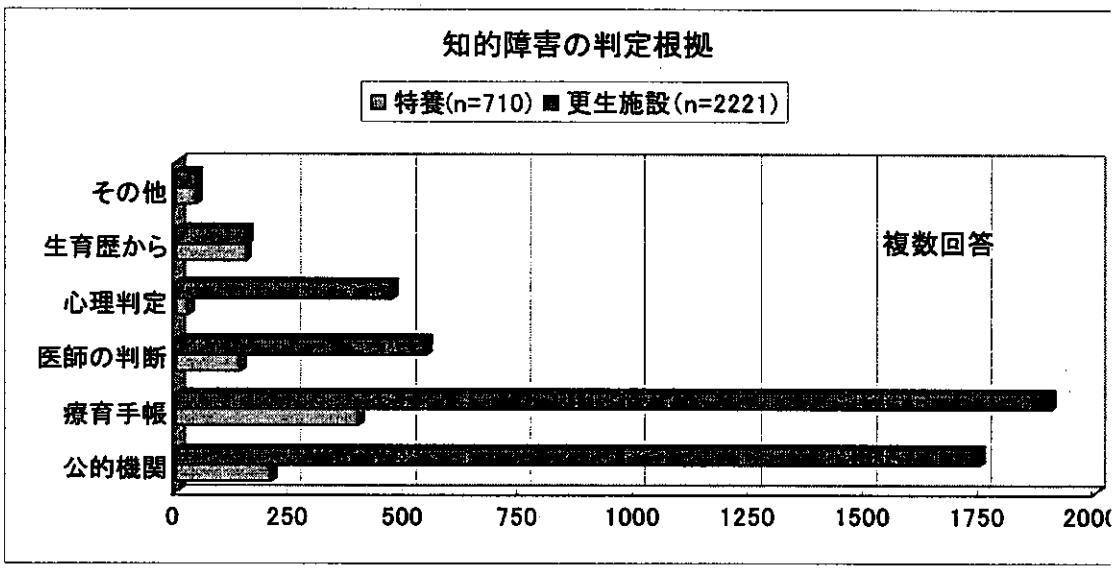
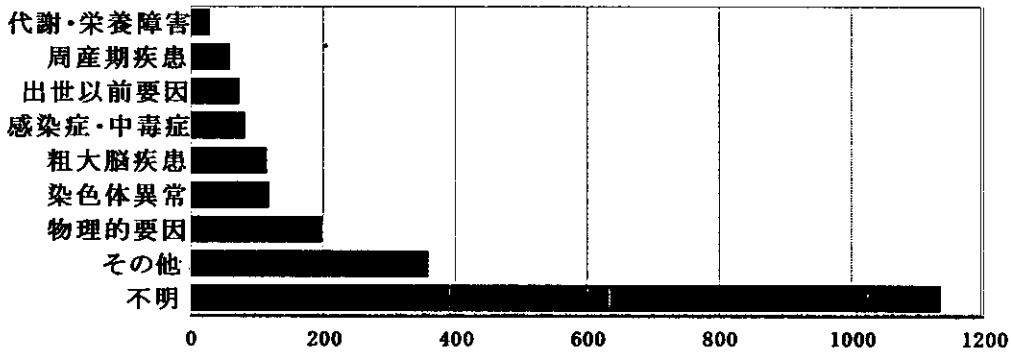


図１．知的障害の判断根拠

(5) 知的障害の原因

知的障害の原因については、両施設の率に大きな差はなく、特に「不明」が多くいずれも過半数を占めていた。唯一「染色体異常」のみに差が見られ更生施設 5.5%(122 名)であるのに対して、特養が 1.4%(10 名)であった。(図２)

知的障害者更生施設(n=2221)



特別養護老人ホーム(n=710)

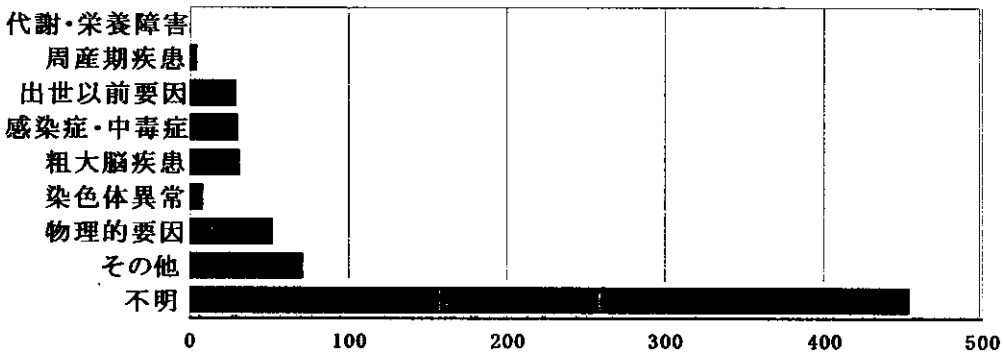


図2. 知的障害の原因

以上のように、基本的な属性において更生施設と特養では年齢構成や知的障害の程度に大きな差が見られることから、以下では、これらを考慮した分析を行なうこととした。

✧ 毎日の生活の状態について

(6) 毎日の生活における行動範囲

毎日の生活における行動範囲について、次のような項目を示して対象者の状態を尋ねた。

① 施設敷地外への外出も見られるなど行動は活発である。
② 普通に行動しているが、その範囲は生活寮周辺か日常の散歩などの生活圏に限られてる。
③ 行動はほとんど生活寮の中である。
④ 動きは少なく、居室中心である。
⑤ ほとんど寝たきり、移動は介助のもとで行なわれる。
⑥ 寝たきりである。　　（その他に「不明」の項目あり）

結果については更生施設と特養に区分し、年齢階層と知的障害の程度別にクロス集計を行なった。

更生施設に生活する知的障害者の行動範囲について、年齢階層別・知的障害の程度別にその内容を検討した結果、年齢が高くなるほど、また障害の程度が重いほど行動範囲が狭くなっていることが明らかであった。（図３）

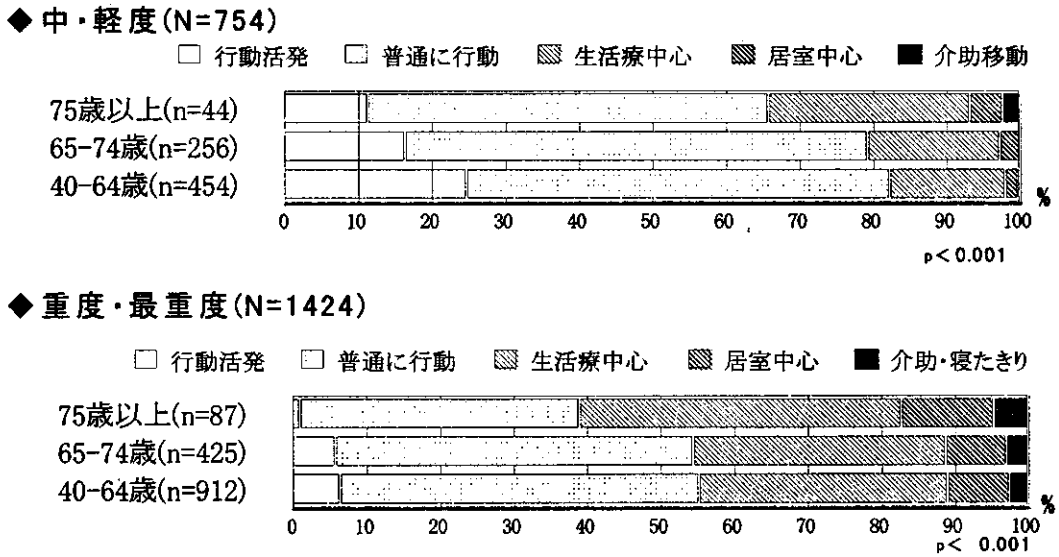


図３．知的障害児施設における行動範囲と年齢階層との関係

例をあげると、行動内容「１．行動活発」のように活発な行動を行なっているのは、年齢３段階の全てにおいて、重度・最重度の対象者よりも、中度・軽度の対象者にその比率が高く、行動範囲が狭くなる「２．」から「５．６．」に行くにしたがって、重度・最重度のその比率が高くなっていた。また、障害の程度を中・軽度群と重度・最重度群に区分して年齢段階別に行動範囲を見てみると１％水準で有意な差があり、年齢が若いほど行動が活発であることが示された。例をあげれば、中軽度群の「１．行動活発」は 40-64 歳では 24.8%(113 名)であるのに対して、65-74 歳では 16.4%(42 名)、70 歳以上では 11.4%(５名)と順次低下している。逆に「３．生活寮中心」は 40-64 歳では 15.7%(71 名)であるのに対して、65-74 歳では 18.0%(46 名)、70 歳以上では 24.7%(11 名)と順次その比率が高くなっている。

重度・最重度群では、40-64 歳と 65-74 歳では大きな差がみられないが、75 歳以上との間には顕著な差があることが明らかとなった。

特養に生活する知的障害者の行動範囲について、年齢階層別・知的障害の程度別にその内容を検討した結果についても更生施設と同様に年齢が高くなるほど、また障害の程度が重いほど行動範囲が狭くなっていることが明らかとなった。(図４)

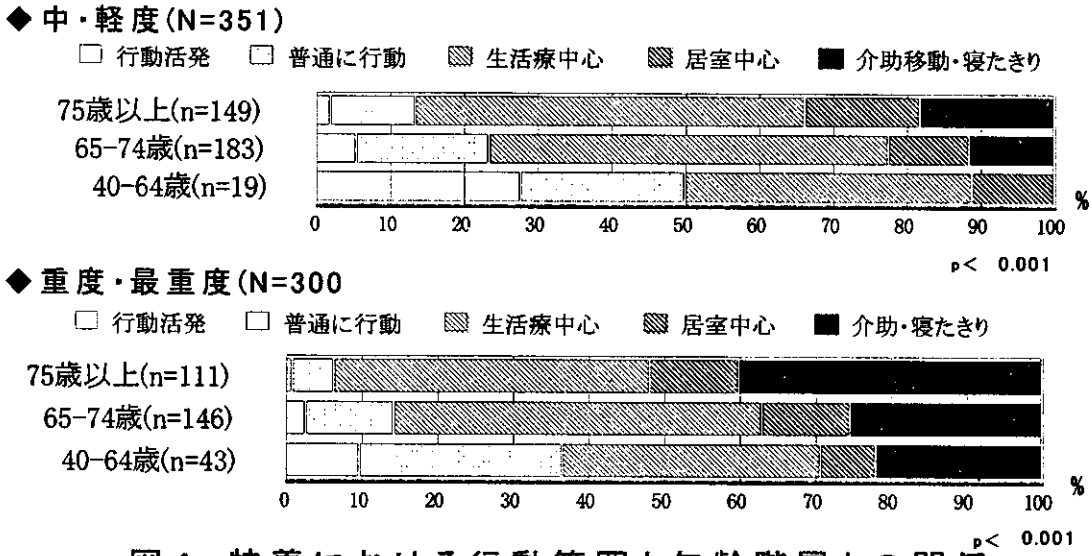


図４. 特養における行動範囲と年齢階層との関係

即ち、行動内容「１」のように活発な行動を行なっているのは、中・軽度群においては 40-64 歳で 27.8%であるのに対して、65-74 歳では 5.5%、70 歳以上では僅か 2.0%と極端に下していた。行動内容「２」も同様な傾向を示しているが、行動内容「３」のように生活寮内が行動範囲となっている対象者は年齢階層順に 38.9%、54.1%、50.1%となっており、「５．６」の介助・寝たきりは各々０%、11.5 %、18.5%の順であった。重度・最重度群においても年齢段階別に１%水準で有意差を示しており、その顕著な差は「５．６」の介助・寝たきりに示されていた。

図３及び図４の双方から更生施設と特養を比較してみると、更生施設がいずれの年齢階層も行動内容「２」の割合がもっとも高かったのに対して特養においては、いずれの年齢階層も行動内容「３」の占める割合が最も高かった。また、更生施設では行動内容「４．５．６」の対象者は全体的に少ないが、特養ではその行動範囲の対象者が相対的に多い。これらのことから、年齢階層を統制して更生施設と特養を比較した場合、全般的に特養の対象者の行動範囲が狭いことが伺える。

特養で生活する対象者の知的障害の程度と行動範囲にも顕著な有意差が見られた。即ち、行動内容について中・軽度群と重度・最重度群を比較すると「１」「２」「３」「４」は中軽度の利用者に出現率が高く、行動内容「５．６」では重度・最重度の利用者の方が高い出現率を示していた。更生施設と比較してみると、特養では重度・最重度群の約 30%が「５．６」であるのに対して、更生施設ではその率は３%程度に留まっていた。したがって、知的障害の程度を統制した場合でも、更生施設よりも特養の方が行動範囲の狭い人の割合が多いことが示された。

(7) 動範囲変化の状況

上記に示した行動範囲は以前に比べてどのように変化したかについて、次の項目を示して回答を求めた。

① 行動範囲を含めて、動きは以前より活発になったように見える
② 以前とあまり変わらない
③ その行動範囲は、近年ややせまくなったように思える
④ その行動範囲は、この１年の間に目立ってせまくなった
（他に「分からない」の項目あり）

結果については、更生施設と特養に区分し、年齢階層と知的障害の程度別にクロス集計を行ない$\chi 2$値を求めた。

更生施設に生活する知的障害者の行動範囲の変化を、中・軽度群と重度・最重度群に区分して年齢階層別に分析してみると、両群とも年齢段階と行動範囲の変化には１％水準で有意差がみられ、年齢段階が高くなるにしたがって行動範囲が狭まる変化が顕著であった。しかし、その変化の傾向は両群に大きな差がみられず、行動範囲の変化は知的障害の程度よりも加齢による影響を強く受けることが示唆された。（図５）

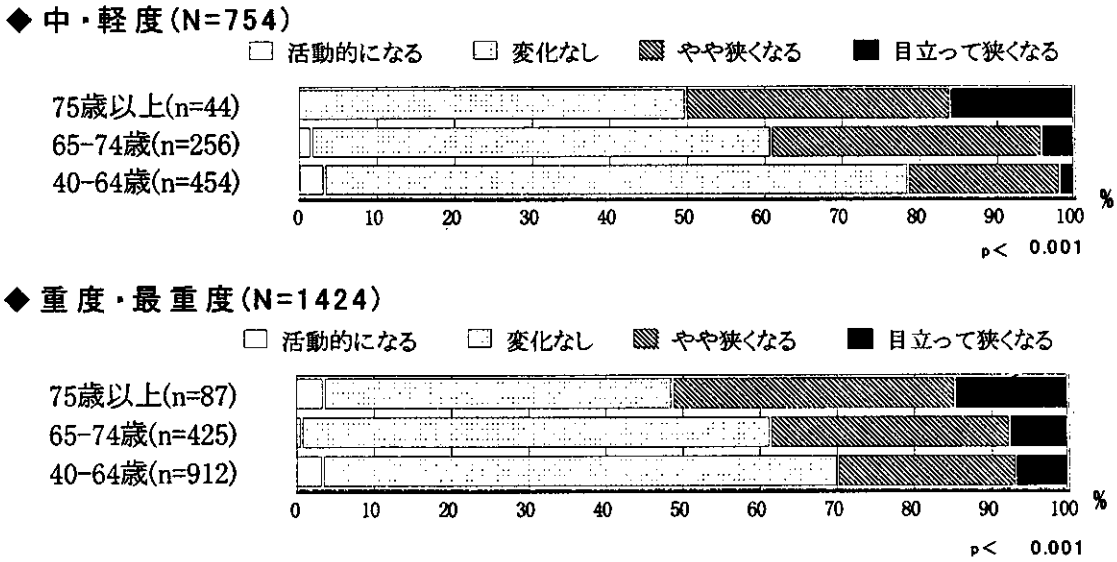


図５．更生施設における行動範囲の変化と年齢段階との関係

一方、特養においては行動範囲の変化と年齢段階との関係は更生施設ほど顕著な傾向を示さなかった。即ち、中・軽度群では５％水準で有意差が見られたが、重度・最重度群においては有意差示さなかった。このことは、更生施設に比して特養で生活する知的障害者は、全般的に行動範囲が狭いことから、変化の度合い（さらに行動が狭まる）が少ないのではないかと推測される。年齢段階別では 75 歳以上と 65-74 歳では両群に大きな差がないものの、40-64 歳ではその差は際だっており、中・軽度群の 90 %以上は「変化がない」のに比して、重度・最重度群では 40 %以上が「やや狭くなる」若しくは「目立って狭くなる」変化を見せていた。

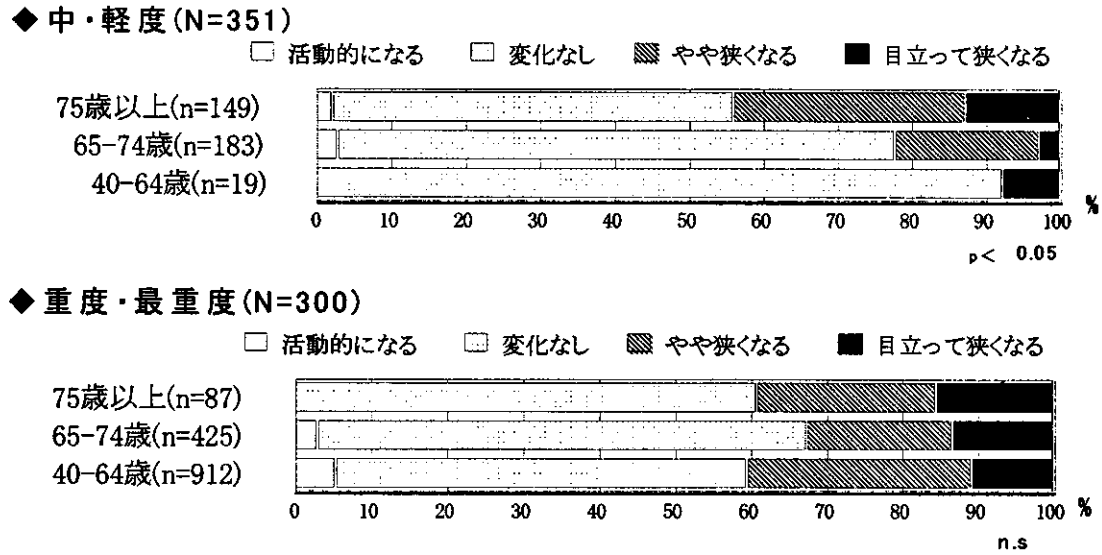


図６．特養における行動範囲の変化と年齢段階との関係

(8) 日常生活行動について

日常生活行動（ＡＤＬ ＆ α）11項目（食事、排泄、入浴、着衣、移動、聴力、視力、手先の機能、言語明瞭度、会話理解・意志表示、服薬管理）を、自立～全介助の５件法で得点化し（自立：１点、ほぼ自立：２点、一部介助：３点、要介助：４点、全介助：５点）、それら 11 項目について施設種別（更生施設と特養）に一元配置分散分析を行い、年齢階層別及び知的障害の程度別に平均値（Mean）とＳＤ（標準偏差）及びＦ・ｔ値を算出した。さらに、各項目と年齢階層の関係では年齢階層が３段階になっていることから、多重比較による詳細な分析を行なった。

結果は、表９に示すとおりである。

表９．日常生活行動等に関する分散分析結果

		知的障害者更生施設			特別養護老人ホーム		
		N	Mean ±SD	F.t	N	Mean ±SD	F.t
食事							
Age	40-64	1364	1.66 ± 0.86		61	1.92 ± 1.19	
	65-74	679	1.67 ± 0.77	3.7 *	327	2.15 ± 1.18	7.1 *
	75 以上	130	1.87 ± 0.81 *		256	2.45 ± 1.20 *	
MR	中・軽度	754	1.29 ± 0.56	373.8 **	349	1.98 ± 1.06	39.6 **
	重度・最重度	1419	1.88 ± 0.88		297	2.56 ± 1.29	

		知的障害者更生施設			特別養護老人ホーム		
		N	Mean ±SD	F.t	N	Mean ±SD	F.t
排泄							
Age	40-64	1361	1.79 ± 1.16		60	2.38 ± 1.66	
	65-74	679	1.71 ± 1.00	6.6 *	329	2.67 ± 1.59	15.0 **
	75 以上	130	2.10 ± 1.19 *		258	3.31 ± 1.57 *	
MR	中・軽度	753	1.31 ± 0.65	225.4 **	349	2.55 ± 1.53	37.8 **
	重度・最重度	1417	2.03 ± 1.23		298	3.31 ± 1.63	
入浴							
Age	40-64	1363	2.39 ± 1.28		60	3.02 ± 1.38	
	65-74	679	2.34 ± 1.19	9.9 *	329	3.44 ± 1.36	16.4 **
	75 以上	130	2.76 ± 1.28 *		259	3.92 ± 1.21 *	
MR	中・軽度	754	1.62 ± 0.93	543.2 **	350	3.33 ± 1.40	30.8 **
	重度・最重度	1418	2.80 ± 1.22		298	3.90 ± 1.19	
着衣							
Age	40-64	1363	1.97 ± 1.21 *		61	2.84 ± 1.55	
	65-74	679	1.82 ± 1.03	3.6 *	328	2.85 ± 1.48	16.4 **
	75 以上	130	1.97 ± 1.12		259	3.40 ± 1.38 *	
MR	中・軽度	754	1.31 ± 0.66	384.6 **	349	2.72 ± 1.44	30.8 **
	重度・最重度	1418	2.25 ± 1.83		299	3.47 ± 1.40	
移動							
Age	40-64	1363	1.93 ± 1.18		61	2.62 ± 1.65 *	
	65-74	679	2.03 ± 1.19 *	10.5 *	329	3.25 ± 1.55 *	18.4 **
	75 以上	130	2.41 ± 1.25		259	3.79 ± 1.39	
MR	中・軽度	754	1.55 ± 0.93	165.7 **	350	3.25 ± 1.56	8.1 *
	重度・最重度	1418	2.22 ± 1.25		299	3.59 ± 1.50	
聴力							
Age	40-64	1349	1.51 ± 0.91 *		60	1.45 ± 0.89	
	65-74	677	1.77 ± 0.99 *	40.2 **	320	1.76 ± 1.06 *	16.4 **
	75 以上	129	2.19 ± 1.12		255	2.18 ± 1.18	
MR	中・軽度	752	1.40 ± 0.79	64.3 **	347	1.87 ± 1.07	2.9
	重度・最重度	1403	1.75 ± 1.03		288	1.98 ± 1.17	

		知的障害者更生施設			特別養護老人ホーム		
		N	Mean ±SD	F.t	N	Mean ±SD	F.t
視力							
Age	40-64	1345	1.54 ± 0.94		61	1.54 ± 0.99	
	65-74	677	1.64 ± 0.88	7.8 *	322	1.76 ± 1.11	4.5 *
	75 以上	129	1.83 ± 0.93		252	1.97 ± 1.16	
MR	中・軽度	751	1.42 ± 0.78	38.9 **	347	1.66 ± 1.02	15.59 **
	重度・最重度	1379	1.68 ± 1.98		288	2.01 ± 1.22	
手先の機能							
Age	40-64	1355	2.23 ± 0.97 *		61	2.44 ± 1.00	
	65-74	677	2.12 ± 0.92	4.0 *	329	2.62 ± 1.11 *	6.5 *
	75 以上	130	2.30 ± 0.94		257	2.89 ± 1.04	
MR	中・軽度	753	1.75 ± 0.76	290.5 **	350	2.45 ± 1.03	46.9 **
	重度・最重度	1409	2.44 ± 0.96		297	3.02 ± 1.07	
言語明瞭度							
Age	40-64	1352	2.41 ± 1.35 *		61	2.33 ± 1.29	
	65-74	677	1.99 ± 1.05	28.9 **	326	2.41 ± 1.17 *	3.5 *
	75 以上	130	2.10 ± 1.11		258	2.65 ± 1.20	
MR	中・軽度	754	1.56 ± 0.82	437.1 **	350	2.15 ± 1.06	72.2 **
	重度・最重度	1405	2.64 ± 1.29		295	2.91 ± 1.23	
服薬の状況							
Age	40-64	1324	2.81 ± 0.95		59	3.03 ± 0.92	
	65-74	666	2.68 ± 0.88 *	5.8 *	328	3.08 ± 0.86 *	9.9 *
	75 以上	128	2.91 ± 0.91		256	3.38 ± 0.81	
MR	中・軽度	730	2.25 ± 0.73	417.9 **	346	2.89 ± 0.86	
	重度・最重度	1388	3.05 ± 0.91		297	3.55 ± 0.71	110.9 **
会話理解・意志表示							
Age	40-64	1336	2.31 ± 1.21 *		61	2.36 ± 1.30	
	65-74	680	1.93 ± 0.90	27.5 **	329	2.34 ± 1.08	2.0
	75 以上	131	2.05 ± 0.99		258	2.52 ± 1.07	
MR	中・軽度	754	1.52 ± 0.65	473.4 **	349	2.03 ± 0.89	
	重度・最重	1420	2.52 ± 1.17		299	2.85 ± 0.17	102.3 **

更生施設においては、11 項目すべてに年齢階層別にも知的障害の程度別にも F（t）値が 3.0 以上を示しており、5％水準以上の有意差を示していた。しかし、F値の大きさを見ると、年齢階層と知的障害の程度別では大きな差があり、ＡＤＬは年齢よりも知的障害

の程度の影響をより強く受けることが示された。年齢階層間で平均値の多重比較を行なってみると、全ての年齢階層間で有意差が見られるのは、11 項目中「聴力」1 項目であり、聴力は年齢と共に平均点が有意に高く（即ち、自立度が低くなる）なっている。他の項目は年齢階層間で有意差があるものとないものがあり次のような状況になっている。

◆「40-64 歳」と「65-74 歳」間に有意差がある項目

着衣、手先の機能、言語の明瞭度、 会話理解・意思表示

◆「65-74 歳」と「75 歳以上」間に有意差がある項目

食事、排泄、入浴、移動、服薬の管理

● 視力については、隣接した年齢階層間では有意差は見られず、「40-64 歳」と「70 歳以上」にのみ差が認められた。

以上のことから、更生施設における高齢知的障害者の日常生活は手先の巧緻性や言語能力を要する行動については、65 歳くらいから介護度が高まるが、食事・排泄・入浴といった毎日繰り返される行動は 75 歳以上から介護度が高まると判断される。

なお、平均点を概観してみると、食事、排泄、着衣等は平均点が比較的低く保たれているのに対して、入浴や手先の機能、服薬の管理等は平均点が高く自立度の低い項目であることが示唆された。

特養においても、大部分の項目で年齢階層別、知的障害の程度別に５％水準以上の有意差をしめしていた。しかし、「会話理解・意思表示」は年齢階層別に、「聴力」は障害の程度別に有意差を示さなかった。Ｆ値の大きさは、更生施設ほど年齢階層と知的障害の程度別に大きな差を示さず、特養の対象者のＡＤＬ・ＩＡＤＬは年齢と知的障害程度の双方の影響を受けていると解釈される。年齢階層間で平均値の多重比較を行なってみると、全ての年齢階層間で有意差が見られるのは、11 項目中「移動」1 項目のみであり、移動は年齢と共に平均点が有意に高く（即ち、自立度が低くなる）なっている。視力について、更生施設と同様に隣接した年齢階層間では有意差は見られず、「40-64 歳」と「75 歳以上」にのみ差が認められた。他の８項目（食事、排泄、入浴、着衣、聴力、手先の機能、言語明瞭度、服薬の管理）は全て「65-74 歳」と「75 歳以上」間に有意差を示していた。これらのことから、特養での知的障害者の日常生活は年齢階層では 75 歳以上から介護度が高まると判断される。

なお、平均点を概観してみると、更生施設と同様に食事、排泄、着衣等は平均点が比較的低く保たれているのに対して、入浴や手先の機能、服薬の管理等は平均点が高く自立度の低い項目であることが示唆された。

さらに、更生施設と特養の平均値を比較してみると、聴力や視力を除くと全般的に特養は更生施設よりも高い数値を示していた。例えば「入浴」に関して年齢階層別に平均値を比較してみると、「40-64 歳」では更生施設 2.39 に対して特養 3.02、「65-74 歳」では 2.34 対 3.44、「75 歳以上」では 2.76 対 3.92 であり、知的障害の程度別でも中軽度が 1.62 対 3.33、重度・最重度が 2.80 対 3.90 となっていた。他の項目も同様の傾向を示していることから、知的障害の程度にかかわらず、高齢になってもＡＤＬの自立度の高い人が更生施設に多いことが示された。

(9) 居室の利用人数について

居室の利用人数は、更生施設と特養との間に有意差が見られ、4 人部屋が更生施設では 38.9%（863 人）であるのに対して特養では 59.7%（423 人）となっていた。また、特養で５人部屋以上が 14.4%（102 人）であるのに対して更生施設では 2.0%（45 人）に留まっており、２人部屋の占める割合は前者が 13.6%（96 人）であるのに対して後者は 33.2%（737 人）であった（表 10）。なお、両施設別に年齢階層と知的障害の程度別に居室の人数に違

いがあるかどうかを検討したが大きな差はみられなかった。

表 10. 対象者が生活している居室の人数

施設種別＼居室人数	一人部屋	二人部屋	三人部屋	四人部屋	五人以上
知的障害者更生施設	214	737	358	863	45
(n=2217)	(9.7)	(33.2)	(16.1)	(38.9)	(2.0)
特別養護老人ホーム	57	96	30	423	102
(n= 708)	(8.1)	(13.6)	(4.2)	(59.7)	(14.4)

( ) 内：%　　p<.000

(10) 周囲の人との関係について

周りの人達との関係については、次の選択肢から該当するもの一つ選択してもらった。結果については、施設種別に年齢構成と知的生涯の程度を考慮してクロス集計を行なった。

① 皆と仲良く生活を送っており、特にそりの合わない人はいない
② 大体うまくいっているが、時に争うような人もいる
③ あまりうまくいっていない、仲の良い人は数えるほどである
④ 殆ど孤立している（例えば、対人関係がもちにくい）
⑤ 全く孤立している（例えば、対人関係がもてない）
（他に、分からないの設問あり）

更生施設では、年齢階層では際立った特徴を示さなかったが、知的障害の程度別では、中・軽度群と重度最重度群では有意差があり、前者の方が人関係が上手く保てている人の割合が多かった。

特養では、年齢構成別にも知的障害の程度別にも有意差がみられ、年齢が若いほど又障害の程度が軽いほど人関係が良好に保てていることが明らかとなった。

(11) クラブ活動への参加とその内容及び参加程度について

クラブ活動への参加は、更生施設では対象者の 53.3%（1147 人）、特養では 52.7%（337 人）が参加しており、両者の比率に差はなかった。しかし、更生施設は特養に比してクラブ活動を実施していない施設が多く、両施設間では「不参加」及び「非該当」に差が生じていた。(表 11)

表 11. クラブ活動への参加状況

	参加している	参加していない	実施していない
知的障害者更生施設 (N=2144)	1,147(53.5)	609(28.4)	388(18.1)
特別養護老人ホーム (N= 640)	337(52.7)	262(40.9)	41(6.4)

( ) 内：%　　p<.05

クラブ活動への参加の有無は、両施設とも年齢階層が若いほど、また障害の程度が軽いほど参加している割合が多い傾向にあった。

クラブ活動に参加している人がどのような活動を行なっているかについて回答を求めた（複数回答）ところ、両施設とも最も多かったのは「音楽活動（コーラス、楽器演奏、音楽鑑賞等)」で、更生施設の 29.2%（340 人)、特養の 57.2%（210 人）であった。次に多かったのは「散歩」で更生施設の 28.2%（336 人)、特養の 37.1%（136 人）が参加していた。

次いで、「美術工芸的活動（絵画、書道、陶芸、彫刻、編物等）」、スポーツ活動（ゲートボール、バトミントン、玉突き等）の順であったが、全体的に更生施設よりも特養の対象者の方が多様なクラブ活動へ参加していた。

クラブ活動への参加の程度は、更生施設の 86.2%（997 人）、特養の 75.3%（271 人）が「必ず」若しくは「よく」参加していると回答されていた。

Ⅳ．知的障害の原因との関連

ここでは、知的障害原因の状況把握及び高齢知的障害者に及ぼす影響について、次の８項目について分析を試みる。

１．知的障害の原因別状況
２．知的障害の原因別にみる特別養護老人ホーム、知的障害者更生施設の利用状況
３．知的障害の原因と年齢との関連
４．知的障害の原因と知的障害程度との関連
５．知的障害の原因と行動範囲との関連
６．知的障害の原因と日常生活行動との関連
７．知的障害の原因と加齢による変化との関連
８．知的障害の原因と健康状態との関連

知的障害の原因カテゴリについては、米精神遅滞学会の分類を参考にして、①感染症または中毒症に起因するもの、②外傷または物理的要因によるもの、③代謝または栄養障害によるもの、④出生後に起こる粗大脳疾患によるもの、⑤不明の出生前要因によって起こる疾患に伴うもの、⑥染色体異常を伴うもの、⑦周生期疾患によるもの、⑧その他、⑨不明、の９区分とした。この分類を基に６５歳以上の知的障害者を主対象群とし、４０歳以上６５歳未満の知的障害者を比較対象群として扱っている。なお、各分析を通して名義尺度のみの場合は、クロス集計とχ２乗検定、残差分析、名義尺度と間隔尺度の場合は、平均値の差の検定及び一元配置の分散分析を用いた。

１．知的障害の原因別状況

本調査の有効回答数は、2,931 人であり、その内、６５歳以上の主対象群と４０歳～６４歳までの比較対象群に区分した知的障害者の原因別人数及び%は、表 12 の通りである。「その他」が主対象群で 194 人（13.4%）、比較対象群で 242 人（16.7%）、全体で 436 人（15.0%）、「不明」が主対象群で 880 人（60.6%）、比較対象群で 718 人（49.5%）、全体で 1598 人（55.0%）となっている。「その他」「不明」を併せると主対象群、比較対象群ともに７割

表12 知的障害原因

			年齢区分 40～64歳	年齢区分 65歳以上	合計
知的障害原因	感染症・中毒症	度数	50	68	118
		%	3.4%	4.7%	4.1%
	物理的要因	度数	132	124	256
		%	9.1%	8.5%	8.8%
	代謝・栄養障害	度数	25	10	35
		%	1.7%	.7%	1.2%
	粗大脳疾患	度数	67	85	152
		%	4.6%	5.8%	5.2%
	出生前要因	度数	47	61	108
		%	3.2%	4.2%	3.7%
	染色体異常	度数	117	15	132
		%	8.1%	1.0%	4.5%
	周生期疾患	度数	53	16	69
		%	3.7%	1.1%	2.4%
	その他	度数	242	194	436
		%	16.7%	13.4%	15.0%
	不明	度数	718	880	1598
		%	49.5%	60.6%	55.0%
合計		度数	1451	1453	2904
		%	100.0%	100.0%	100.0%

前後を占める。無回答は、27 人。

２．知的障害の原因別にみる特別養護老人ホーム、知的障害者更生施設の利用状況

６５歳以上の知的障害者の施設種別別利用状況は、表 13 の通りである。特別養護老人ホーム、知的障害者更生施設ともに、「不明」が７割前後、「その他」が１割台と「不明」「その他」でほとんどを占めている。さらに、「不明」「その他」を除外して原因別の偏りをみたが、有為な差は認められなかった。

６５歳未満の比較対象群においては、特別養護老人ホーム利用者の人数が少なく十分な分析が出来なかったため、全体（４０歳以上）の傾向を把握することにした。全体では、特別養護老人ホームの利用者に「不明」が、知的障害者更生施設の利用者に「代謝・栄養障害」「染色体異常」「周生期疾患」が多く、ともに 1%水準で有為差が認められた。(図７参照)

表13　知的障害原因 と 施設種別(65歳以上)

			施設種別		
			特別養護老人ホーム	知的障害者更生施設	合計
知的障害原因	感染症・中毒症	度数	30	38	68
		%	4.7%	4.6%	4.7%
	物理的要因	度数	49	75	124
		%	7.7%	9.2%	8.5%
	代謝・栄養障害	度数	2	8	10
		%	.3%	1.0%	.7%
	粗大脳疾患	度数	33	52	85
		%	5.2%	6.4%	5.8%
	出生前要因	度数	27	34	61
		%	4.3%	4.2%	4.2%
	染色体異常	度数	8	7	15
		%	1.3%	.9%	1.0%
	周生期疾患	度数	5	11	16
		%	.8%	1.3%	1.1%
	その他	度数	68	126	194
		%	10.7%	15.4%	13.4%
	不明	度数	413	467	880
		%	65.0%	57.1%	60.6%
合計		度数	635	818	1453
		%	100.0%	100.0%	100.0%

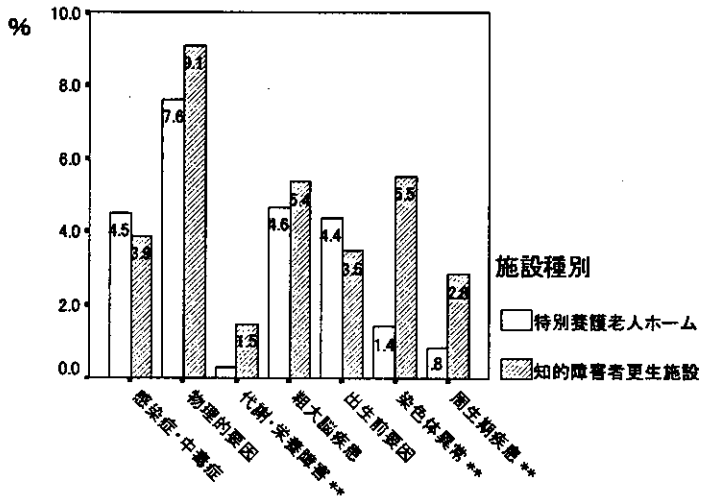


図7　知的障害原因と施設種別(不明、その他は除外)

３．知的障害の原因と年齢との関連

４０歳以上の知的障害者の原因別にみる年齢の分布は、図８の通りである。各原因別の平均年齢、標準偏差は、「感染症・中毒症」(64.2 ±11.2)、「物理的要因」(62.3 ±11.4)、「代謝・栄養障害」(56.3 ±10.1)、「粗大脳疾患」(63.2 ±11.1)「出生前要因」(63.6 ±11.0)、「染色体異常」(52.7 ±9.0)、「周生期疾患」(55.9 ±10.8)、「その他」(60.1 ±11.4)、「不明」(63.9 ±11.0) である。「染色体異常」が最も平均年齢が低く、「周生期疾患」、「代謝・栄養障害」の順となり、最も高いのが「不明」である。「染色体異常」と「周生期疾患」は、「代謝・栄養障害」を除いた他の群と比較し、有為な差 (P<0.05) が認められる。

上記の対象群から６５歳以上（主対象群）を抜きだし、年齢の傾向をみたのが図９である。その平均年齢及び標準偏差は、「感染症・中毒症」(72.4 ±5.4)、「物理的要因」(71.8 ±5.3)、「代謝・栄養障害」(68.8 ±2.5)、「粗大脳疾患」(71.4 ±5.3)「出生前要因」(71.7 ±5.1)、「染色体異常」(72.3 ±6.9)、「周生期疾患」(71.4 ±6.5)、「その他」(71.5 ±6.0)、「不明」(72.0 ±5.8) である。「代謝・栄養障害」は、他の群と比較して平均年齢が低く、標準偏差も小さいが、他は、平均年齢、標準偏差ともにそれほどの差はみられない。

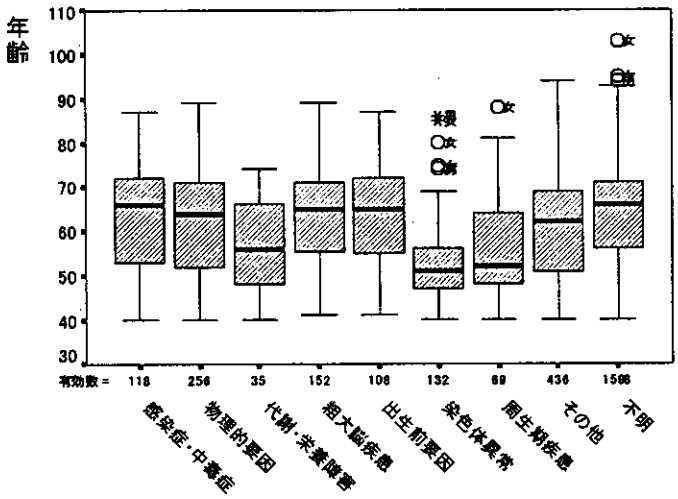


図8 知的障害原因別年齢

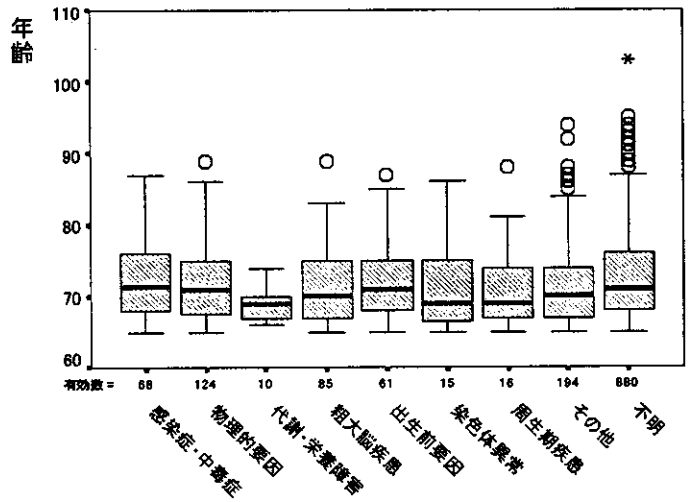


図9 知的障害原因別年齢(65歳以上)

4．知的障害の原因と知的障害程度との関連

６５歳以上の知的障害者（主対象群）を程度別、原因別に人数と割合を現したものが表 14 である。この中から知的障害程度の「不明」と知的障害原因の「その他」「不明」を除外し、程度と原因の関連をより明確に分析するよう試みた。特徴的なことは、「染色体異常」に中軽度の知的障害者が多く、「出生前要因」に重度・最重度者が多い。いずれも５％水準での有為差が認められる。（図 10 参照）

６４歳以下の知的障害者（比較対象群）においては、図 11 の通りであるが、「染色体異常」のみに知的障害程度間の極端な違いがでてきている。その他の群に有為な差はない。

表14　知的障害原因 と 知的障害程度（65歳以上）

			知的障害程度			合計
			中軽度	重度・最重度	不明	
知的障害原因	感染症・中毒症	度数	24	42	2	68
		%	3.8%	5.5%	3.4%	4.7%
	物理的要因	度数	53	65	6	124
		%	8.5%	8.5%	10.2%	8.6%
	代謝・栄養障害	度数	6	4		10
		%	1.0%	.5%		.7%
	粗大脳疾患	度数	28	52	4	84
		%	4.5%	6.8%	6.8%	5.8%
	出生前要因	度数	16	42	3	61
		%	2.6%	5.5%	5.1%	4.2%
	染色体異常	度数	10	5		15
		%	1.6%	.7%		1.0%
	周生期疾患	度数	4	12		16
		%	.6%	1.6%		1.1%
	その他	度数	82	106	6	194
		%	13.1%	13.9%	10.2%	13.4%
	不明	度数	402	436	38	876
		%	64.3%	57.1%	64.4%	60.5%
合計		度数	625	764	59	1448
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

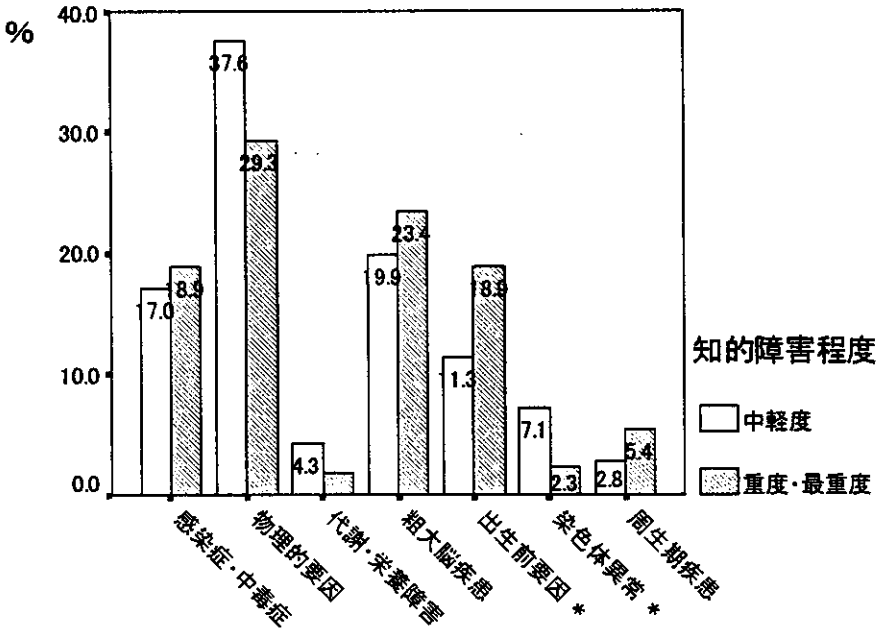


図10　知的障害原因と程度（65歳以上）

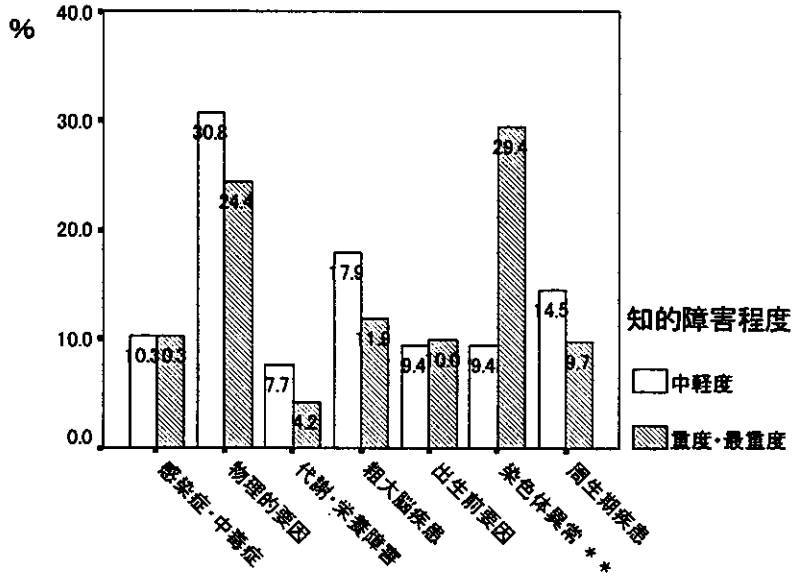


図11　知的障害原因と程度(65歳未満)

5．知的障害の原因と行動範囲との関連

行動範囲は、①敷地外に外出することもある、②生活寮の周辺、③生活寮の中、④居室中心、⑤ほとんど寝たきり移動は介助必要、⑥寝たきり、のカテゴリに分類し、知的障害原因（６５歳以上の主対象群）との関連をみたのが表４である。カテゴリの数が多く、一つのカテゴリデータが少なく分析が困難となっているため、行動範囲のカテゴリの統合を行って、その傾向をみた。「感染・中毒症」に行動範囲の狭さをうかがわせるところもあるが、有為な関連を示しているとはいえない。(表 15 参照)

表15 知的障害原因 と 行動範囲

			行動範囲						合計
			行動は活発	普通に行動	生活寮中心	居室中心	介助移動	寝たきり	
知的障害原因	感染症・中毒症	度数	2	27	17	7	9	6	68
		%	2.9%	39.7%	25.0%	10.3%	13.2%	8.8%	100.0%
	物理的要因	度数	9	45	49	8	7	5	123
		%	7.3%	36.6%	39.8%	6.5%	5.7%	4.1%	100.0%
	代謝・栄養障害	度数	2	4	3	1			10
		%	20.0%	40.0%	30.0%	10.0%			100.0%
	粗大脳疾患	度数	5	29	39	6	3	3	85
		%	5.9%	34.1%	45.9%	7.1%	3.5%	3.5%	100.0%
	出生前要因	度数	2	16	30	6	2	4	60
		%	3.3%	26.7%	50.0%	10.0%	3.3%	6.7%	100.0%
	染色体異常	度数	1	3	3	7	1		15
		%	6.7%	20.0%	20.0%	46.7%	6.7%		100.0%
	周生期疾患	度数	1	3	6	3	3		16
		%	6.3%	18.8%	37.5%	18.8%	18.8%		100.0%
	その他	度数	15	68	75	23	10	3	194
		%	7.7%	35.1%	38.7%	11.9%	5.2%	1.5%	100.0%
	不明	度数	52	307	344	73	69	33	878
		%	5.9%	35.0%	39.2%	8.3%	7.9%	3.8%	100.0%
合計		度数	89	502	566	134	104	54	1449
		%	6.1%	34.6%	39.1%	9.2%	7.2%	3.7%	100.0%

6．知的障害の原因と日常生活行動との関連

日常生活行動に関しては、食事、排泄、入浴、着衣、移動、聴力、視力、手先の機能、